



劉慈欣 『三体』 と人列コンピュータ

■ 大森 望



2019年7月に邦訳が出た劉慈欣^{リウ・ツーシン}『三体』(早川書房)は発売1カ月で12刷(電子版と合わせて11万部超)に達し、ちょっとした中国SFブームを巻き起こしている。もともと英訳版は2015年のヒューゴー賞を受賞し、オバマ前大統領やマーク・ザッカーバーグも絶賛。2008年に出た本国版も、こうした海外での評価を背景に人気が発火、三部作合計で2,100万部を超えたという。劉慈欣はいまや“国の宝”と言われる超VIPだが、『三体』執筆当時(2006年)は、山西省の山間部にある発電所のエンジニアだった。長年コンピュータ管理を担当していたそうで、そのせいか、作中にも新旧とりまぜ、さまざまなコンピュータが登場し、重要な役割を果たす。

小説の内容をざっくり説明すると、テーマは異星文明とのファーストコンタクト。若き女性天体物理学者・葉文潔^{イェ・ウェンジェ}を軸に、文化大革命当時(1967年)の糾弾集会の壮絶なエピソードで始まる過去パートと、ナノマテリアル研究者の汪淼^{ワン・ミャオ}が超自然的な怪現象に見舞われる現代パートの2本柱で進行する。その汪淼が作中でプレイするオンラインVRゲーム「三体」が読みどころのひとつ。

ゲームの舞台は、三つの太陽を有する惑星。運行が予測できないため、いきなり極寒に襲われたかと思えば灼熱地獄に陥ったりして、幾多の文明が滅亡してきた。プレイヤーの目的は、文明の発展段階を先へ先へと進めつつ、三体問題を解くことで太陽の運行に法則性を発見し、万年曆をつくること。汪淼は歴史上の人

■ 大森 望

書評家, 翻訳家, SF アンソロジスト

1961 年高知市生まれ。京都大学文学部卒業。書評家, 翻訳家, SF アンソロジスト。責任編集の『NOVA』全 10 巻で日本 SF 大賞特別賞, 星雲賞受賞。著書に『21 世紀 SF1000』『現代 SF 観光局』など。訳書に劉慈欣『三体』(共訳) など多数。



物 (のキャラクター) たちとともにこの難事に挑む。たとえば, フォン・ノイマンとニュートンは, 膨大な計算のため, 秦の始皇帝から三千万人の兵士を借り, それぞれに手旗を持たせて 1 辺 6 キロメートルの正方形に並べ, 巨大な人列コンピュータ (秦 1 号) をつくりだす。OS 「秦 1・0」の起動場面はこんな具合。

〈ピラミッドの中腹あたりにいる, 一列に並んだ旗手が, 手旗信号で指令を発信すると, 下方の大地の, 三千万人から成る巨大なマザーボードが, 水面で光がきらめく湖へと一瞬で変わったかのように見えた。数千万の小旗が揺れ動いている。ピラミッドのふもと近くに広がるディスプレイ隊形では, 緑色の大きな旗から成る進行度表示線プログレス・バーがじりじりと延びていって, 現在進行中のセルフチェックがどこまで進んだかを示している (後略)〉

この部分のはちに独立した短編「円」に仕立て直され, ケン・リュウ編訳の英語版『折りたたみ北京 現代中国 SF アンソロジー』に収録されて, 2018 年に邦訳が出ている (「円」のみ Web 上で無料公開中)。また, 『三体』終盤では, 11 次元の陽子を 2 次元に展開して回路を焼きつけた突拍子もないウルトラスーパーコンピュータ (その名も “智子”) が登場するが, そのとんでもないスペックはぜひ現物で確かめてください。劉慈欣の啞然とするような想像力と中国 SF の (まさに大陸的な) 大らかさが堪能できます。